

# 発 刊 の ご 挨拶

2002年3月31日

人類進化モデル研究センター長 松林 清明

京都大学霊長類研究所附属サル類保健飼育管理施設（略称：サル施設）は、1984年に施設設立15周年記念誌を発刊しました。1999年には30周年を迎えたわけですが、折しもその年はサル施設が転換されて新しく人類進化モデル研究センターとしてスタートする年となりました。それでこの機会に、サル施設30周年と新センター発足の両方を記念する冊子を編むことにしました。15年刻みの記念誌というのはやや間遠な感じはしますが、その分、より多くの変遷を概観できる利点があります。簡単にサル施設時代の歩みを振り返り、併せて新センターとしての進路を考えてみたいと思います。

サル施設としての30年のうち初めの10年は、サル飼育管理のノウハウを身に付け、飼育設備の整備に重点を置いて築き上げた草創期でした。次の10年は、自家繁殖体制の基盤を作り上げる時期となりました。そして最後の10年は、手探りで動物福祉に取り組んだ時期だと言えます。研究用サルの安定的な維持に必要な手順を、順序通りに踏んできたこととなります。しかしながら「サル類保健飼育管理施設」という名称に表される位置づけでは、ここまでの精一杯でした。

私たちは、実務をやり遂げることで自己完結するのではなく、大学の研究施設という特色を生かして、サル類を対象とする実験動物学研究を強く推進できる組織でありたいと常に考えてきました。そのためには教官陣容の充実が不可欠であり、サル施設時代のちょうど半ばあたりには既に新しいセンターへ転換する構想を検討し始めました。以来十数年、施設内や所内での検討を積み重ねる長い時間を経て、漸く研究所概算要求の重点項目に取り上げられ、当初の要求規模を遙かに上回る組織強化が実現したことに、希望と責任を感じています。

求めた道具立てを与えられた以上、それを拠り所にしてきちんとした成果を挙げて行かなければなりません。折しも、研究用サルを巡って様々な問題が持ち上がっています。霊長類研究を今後も継続するだけでなく、さらに発展させてゆくためにはどのようなサルが必要なのか、研究面でも社会面でも、明確なモデルの提示が必要となっています。私たちは、ヒト進化研究にとって理想的な研究用サルの開発とその中身の吟味に打ち込み、身体・精神から暮らしの環境までも配慮の行き届いたサルとそれへの接し方を実現したいと考えています。

進化モデルセンターとして新しいスタートを切れたのは、ここまでのサル施設の歩みを支えて下さった所内外の多くの方々のご支援の賜ですし、これからの道のりを進んで行くにも、皆様方のお力添えを頂かなければなりません。この機会に、さらなるご叱正・ご鞭撻をお願いする次第です。